

〈研究ノート〉

## 合巻『色男大安売』考、その翻字と解題Ⅲを通して

康 志 賢

### 一、はじめに

「草双紙は平仮名ばかりで読むのに骨が折れるが、書かれた（描かれた）テキストをきちんと（読む）必要がある。挿絵を眺め文字を追って粗筋を掴むだけならいざしらず、基本的には注釈作業なしでは読めないテキストだからである。当代の流行に敏感に反応して書かれた草双紙を読むことは、挿絵等の理解を含めて大変に難しい。些細な道具一つ取っても分からないことが多い。」<sup>①</sup>という指摘に言い尽くされている注釈作業の意義に従いつつ、本稿では別稿「『色男大安売』考——翻字と解題（Ⅰ）」（『文学研究』九四号、日本文学研究会、二〇〇六年四月）、（Ⅱ）（『東大超域文化科学紀要』十一号、東京大学、二〇〇六年九月）に続いて、後編（十六丁表から二十丁裏迄）の翻字と解題を通して『色男大安売』を考察する論攷である。<sup>②</sup>

詳しい書誌は前稿（Ⅰ）に譲り、ここでは基本的な書誌事項

のみ再確認しておこう。丁数は前編十五丁、後編十丁、計二十五丁。見返しに前編・後編ともに「十遍舎一九作 勝川春扇 画 前編（後編） 色男大安売 庚辰春 甘泉堂梓」と記される。本稿の底本は木村文庫本・蓬左文庫本をも適宜参照するが、基本的には国立国会図書館本である。

凡例は以下の如くである。

一、翻字に当たり、句読点を私意により附しつつ、適宜漢字混じりに改め、底本の仮名はルビに全て記した。

一、底本の漢字・平仮名は通用字体に改めたが、助詞「ハ」「バ」の片仮名表記はそのままとした。

一、清濁は底本のままにし、促音・拗音は通用字体の大きさに改めた。「つ」↓「っ」、「や」↓「ゃ」等。「さまざま」は「よまざまま」の意。

一、句読点は私意により附した。

一、本文（地の文）台詞には私意に「」を附した。

一、底本の読み継ぎの記号(合印)は省いた。  
一、翻字、及び引用文中の( )の中・傍線・傍点は、筆者の補である。

## 二、『色男大安売』内容の考察

### 1 若隠居の密かな願い(十六才、図1)

艶二郎せっかくもった女房にまで出ていかれて、また色事を心かけけれども、相手なければ呆れはて、もはや引札も間がぬけていかず、されバとて他所の飯どき考へて、「色事ハできませぬか、色男はへく」と、呼ばはつても歩かれず、どふしたものであらふと思案しているところへ、また心安き男来たりて、「さてくそなたハ幸福者だ。金儲けの運がむいて来た。前祝ひに酒でも買へ」と、気負ひか、つていへバ、「何にしろ金儲けとハ耳寄りな、それハどふしたことだ」と聞けバ、「まづ酒でも買はねバ言われぬ」と、酒肴を奢らせ、この男のいふにハ、「我等出入の、さる大家の御隠居様、お下屋敷においでなさるが、こなたの美男を聞及ばれ、金銀にハかまはぬ、たつた一度なりともこなたと二人寝てみたい、とのお希み、御隠居様といへハ、どふやら年寄りのやうなれども少し訳あつて、若隠居様、今年ようく三十になるやならずのかん平擬き、内々我等へたつてのお頼み、しかしこゝに話がある。その御隠居様、芝居の役者の女形がおすきゆへ、ならふことなら、そなたを女形に拵へ、舞台の通りに鬘をかけて衣裳ハもちろん諸事女形に

仕立、楽みたいとお希み、金ハいくらでもそなた希み次第、なんとおもしろい相談であらうが」と、小鼻をいからし申ける。(艶二郎)へはて、捨てる神あれバ助ける神あり。天道人殺さず。果報(=幸運)ハ寝て待て。茶漬飯ハ起きて食へか、奇妙く。

(男)へなんでも福徳の三年目。貴様のおかげで俺も浮みあがることだ。案配よくやつつけてください。

\*美男艶二郎を芝居役者の女形に仕立てて一晩寝てみたい、お金は望み次第、という若隠居の話をも艶二郎に持ちかける友人前祝いで料理と酒肴を食べる兩人である。本文はほぼ会話体で運ばれる。「色事ハできませぬか、色男はへく」と、ご飯のおかずのように色を売り歩くという滑稽な設定かと思うと、続く「と、呼ばはつても歩かれず」から、結局ここまで非現実的な馬鹿はやらないのが黄表紙との差。「また心安き男」の「また」という表現が滑稽。即ち、作者承知の上で繰り返し意図した演出であることを表す。心安き男は口語体で喋る。「今年ようく三十になるやならずのかん平擬き」は『仮名手本忠臣蔵』七段目の詞章を踏まえる。ここで男だと分かるのに、後で艶二郎が若隠居は女だと思つていたという設定は矛盾。「擬き」とは、さも似ているの意、まがいと同意。艶二郎の台詞は諷刺し。「福徳の三年目」とは、福徳は神仏が三年に一度ぐらいたらす意から、ひさしぶりの幸運に出くわすことをいう。「一



図1 若隠居の密かな願い (十六才)

九は、何でも福徳の三年目と、大きに喜び」『色外題空黄表紙』  
 (享和三年刊、一九作画、大東急記念文庫所蔵本) 十二才。「浮み  
 あがる」とは、助かるの意。

2 若隠居の正体 (十六ウ・十七才、図2)

艶二郎ハまた此相談にかゝり、それより日限を極め、その男  
 と打連れて下屋敷へ至り、かねて注文のこたく、艶二郎顔に白  
 粉をぬりたて、女形の鬢をかぶり、舞台衣裳の損料借りしてこ  
 れを着飾り、すつぱりとお好みの通りに拵へ済まし、かくと奥  
 へ言ひ入れハ、御側使ひの腰元の十七八なるが、二人いづれ  
 も派手に作り立て、向かひに出て、艶二郎を打連れて奥深くゆ  
 くに、幾間もく金銀の襖、唐紙をあけて、すつと奥の大座敷  
 に至りてみるに、結構つくめの床飾り銀燭台いくつともなく、  
 つらりと灯し連ねて、男混ぜずの女中はかり大勢、琴三味線  
 に囃し立て、酒肴座敷の狭きほど取り散らしあるに、その御  
 隠居と覺しきものハみへす、艶二郎おづくと末座に直り会釈  
 しているに、年かましき女 盃を持ち来り。艶二郎へ勧め、「さ  
 てくこなたハ幸福者なり。こゝもとの御隠居様ハ、このこと  
 くお情け深く、お氣に入りしものへハ、いかほどの希にても、  
 お聞、届けなされて使はさる御気性、そなたのことを予て聞、  
 及び給ひ、憧れ給ひて、今日わざく召し出さる、ハ、この上  
 もなき幸福者、今に御隠居様御出であらバ、よく御機嫌を  
 とり、あなたの仰せ次第にしてお氣に入るやう、しやるがよか

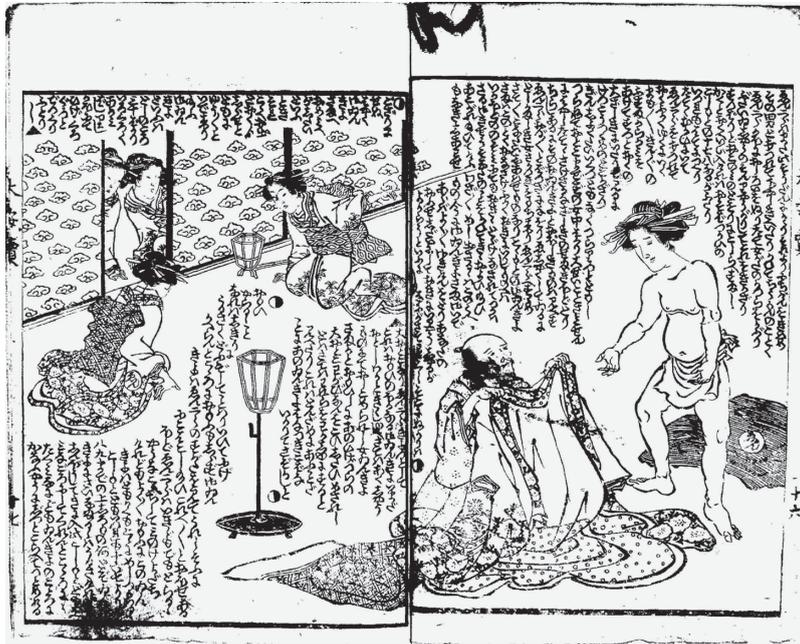


図2 若隠居の正体 (十六ウ・十七オ)

らう」といふに、「なにがさて、わたくしそこに抜かりハござりませぬ。早く御隠居様へ、お目見へがしたい」といふとき、「それこ、へお出」と、奥より知らせと共にゆう／＼といで来り給ふ御隠居といふハ、歳の頃三十ばかり、色黒く赤み走りし顔にて髭黒々と、でつくり太りし大男なり。艶二郎きよつとして、「これハ思ひの外なる御隠居、未だお年若と聞きしゆへ、さてハ悪性ものにて、押し込められし女隠居様かと思ひしに、あの髭面の大男、我が美男を恋ひ慕ひ召されしとハ、さてハ我等を若衆にするとみへたり。これハとんだめにあふことだ。殊にあの隠居、鼻付き小鼻いかりて、さぞかしと思ひやらる、ことなれば、しきりにうるさく、どふぞして断り言ひて逃げ帰らん」と、心に思ふも知らず、御隠居ハ艶二郎の姿をみて嬉そふに「こはこし給ひ、「これへ／＼」と仰せあるほど、艶二郎ハ生き肝でも取らる、やうな心地して身の毛よだちけれども、よく／＼思ふに、「この隠居ハともかくも、こゝに召し使はる、腰元とも、いつれも十六七より八九までの上代物、何とぞ隠居に苛まる、ハ憂きけれども、辛抱して気に入、此腰元どもを皆殺(し)にしてくれん」と、心に企み、何事も隠居の心に叶ふやうに、じつと堪へて勤めける。

\* 女装した艶二郎は、腰元たちの案内で隠居の下屋敷、奥深くの大座敷へ連れて行かれる。女の隠居だろうと誤解していた艶二郎は、出たのが髭面の大男で嫌で堪らなかつたものの、

腰元たちをせしめてやる企みで我慢して務める。ストーリーが本文（地の文）の中に設けられた間接話法の形で運ばれるゆえ、詞書は別に設けられていないのか。

本図の画面は異時同図法を以て分けられている。異時同図法は既に大和絵にも使われた独特の構図である。その流れを汲んで、例えば「浮世忠臣蔵」（歌川豊国画、大てん馬三丁目吉兵衛板）で、格段ごとに一枚の中に、その段の色んな場面が同時に描かれたりする。「浮絵仮名手本忠臣蔵九段目」（北尾政美画、安永九ノ寛政九、通油町鶴屋板）では、九段目の見せ場を色々一枚の中に描くが、時間的に早いのは前方に大きく描かれる。赤本の絵柄を利用した黄表紙の絵柄について内ヶ崎有里子（『江戸期昔話絵本の研究と資料』三弥井書店、一九九九年）氏は「登場人物の位置移動については、黄表紙では先に動作や行動を起こす人物を右側に描くことで、本文と絵柄を対応させやすくなるという効果を考慮したものではないだろうか」と論じられており、本図においても同様のことがいえよう。時間の流れによる空間（大座敷）が繋がっていて、独特な構成である。左右は同じ座敷（実際は同じ下屋敷の中であっても場所は移動している）の中のように繋がって描かれる。右側では着替え中の艶二郎（女の髪を被り、腹が出た滑稽な裸身）とそれを手伝う友の男。左側では着替えを済ました艶二郎（後ろ姿）が両手をつけて腰元に挨拶し、豪華な唐紙の襖を半分開けてそれを覗いている腰元二人。前方に大きく描かれている銀燭台は蠟燭を立てる

燭台に覆いが付いた「ぼんぼり」というものである。ぼんぼりの手燭もみえる。

艶二郎に対して「幸福者なり」が『色男大安売』では度々使われるが、艶二郎を皮肉る為の意を込める。本場面では「女隠居様かと思ひしに」という一人錯覚・誤解も甚だしかった艶二郎だが、最後は卑語や下ネタを以て負け惜しみを披露する。「年かましい」とは相当の年配らしい、「悪性」は浮気、好色、「にこはこ」はにこにこの意。

### 3 腰元との駆落ち（十七ウ・十八オ、図3）

艶二郎ハ腰元のうち目につきたるがあるゆへ、何卒これを手にいれんと思ふばかりにて、御隠居奇まる、を堪へけれども、この隠居様生れついて女嫌ひにて、衆道至つての御好物、そのくせ年若なる綺麗な若衆ハ御嫌ひ、とかく三十越して四十ぐらひまでの男をみると、しなだれか、り給ひて、つきぐの人のくいづれも女ぼう子どものある者を捉へて、芝居の女形に仕立奇み給ふゆへ、主命なればひなく御心に従へども、いかにしても難儀のすじゆへみなく相談して、眉目よき女どもを抱へ御傍にさしおき、これに心を移し給ふやうにと、いろく女どもにも言ひ含め、御隠居の心の味になるやうに致しけるに、とかく御隠居ハ女にハ目もやらず、つきぐの親仁どもを困らせけるゆへ、さてこそ此艶二郎といふものを勧めて御隠居へあてがひしなり。艶二郎始めのほどハ堪へくつて勤めけるが、い



図3 腰元との駆落ち (十七ウ・十八オ)

かにして最早たちきれがたく、腰元のうちおちよんといふ浮気者らしきにいちやつきて、早速相談が出来たるゆへ、艶二郎急き込み、相手の出来しうへハ、片時もこゝに足を止めている所でなし、と今まで苛まれし尻に帆をかけて、夜中に此女を引つれ、駆落ちと出かけるが、この女ハ親元武士にて至つて難しき親仁とき、て、女の親元へも頼らず、さらバ速き田舎へなりとも、連れ退かんと思ひけるが、何にしても夜道ハ嫌なり、夜明けなバともかくもすべしと、心安き船頭を頼みて屋根船を拵へさせ、この船にて一夜明かすつもりにて、船頭至つての酒飲みなればたらふく飲ませて生酔いとなし、艶二郎二人も酒に酔いたるふりして、船の中に倒れ夜を明かすつものところ、あまりに空腹になりしゆへ、なんぞ食ひ物を調へ来るべし、とておちよんを船に残しおき、艶二郎買物に船を河岸へつけて上がりゆきける。後にハ船頭も酔い倒れて打伏し、おちよんも何かの心遣ひのうへ、すこしの酒に酔いてこれも前後を知らず打伏しける。しかるに何者にや比丘尼を一人背中に負ひて来か、りし男、これも如何様色ゆへの駆落ち者とみへて、人目を忍ぶ態にてこの河岸端へ比丘尼降ろし、「あやふくそなたの癪を起こしたるにて、今宵のうち志の方までハ、とてもゆかれず。幸い向かふの船に人もなき空船の態なれば、まづ／＼あの船へ乗りて、しばらく息を休め、夜明けて発ち退くべし」とて、かの男そろ／＼船へ近づきてみれば、誰か寝ているゆへ起こして頼まんと思ひ、もし／＼と声掛くれども、ぐつともすつとも音も

せず、さてハよく寝入りしならんと探り回しみれば、頭巾を被りし女、前後も知らぬ態に、かの男打領き、「さてハこの女も色事か、なんにしても」

つぎへつゞく

\*三十代の男ばかり好む主人の相手になつていた付き人たちは、困り果て綺麗な女を側に置いても効果なく、艶二郎を呼び込んだのであつた。いよいよ腰元おちよんと出来て駆け落ちをした艶二郎が、屋根船におちよんを残して買物に行つた間、比丘尼を背負つた男が船を覗く。台詞と地の文が一体になつてゐるような本文のゆえ、別に詞書(台詞)を設ける必要がなかつたとみえる。

本場面にも滑稽味が際立つ。主の衆道の相手にならざるをえない妻子持ちの親仁達が困つて相談するという状況、及び、自分達の難儀を逃れる為に美女を置くという目的・結果も滑稽。また、滑稽性が漲る以下の詞章から作者の持ち味が窺える。「つきぐ」の親仁ども(「おやち」という表現の滑稽性)を困らせけるゆへ、さてこそ此艶二郎といふものを勧めて御隠居へあてがひしなり(滑稽な種の種明かし)。「艶二郎始めのほどハ堪へく(繰り返しの滑稽)、今まで苛まれし尻に帆をかけて(下ネタ、掛詞)」。

図柄は歌舞伎の道行の舞台を見るように、二人が中央前面に大きく描かれていて迫力満点である。蛇の目傘(開いてない)の艶二郎(白手拭いの頬被り、尻からげの素足、鮫鞘の刀(黒柄牡

丹彫鮫鞘一本差し・助六)。二重まぶたではあるが、目尻が下がつており、七代目團十郎の似顔画ではない)の後ろに紫か黒の縮緬地の大明頭巾(袖頭巾・御高祖頭巾とも)を被つたおちよん。従来の道行の濡れ事師は、紅股引きに草履、着物の後ろを帯へ挟む形容であつたが、五代目松本幸四郎は尻からげの素足に白粉(寛政六年八月桐座「月眉恋最中」の梅川と亀屋忠兵衛の道行)して見物人を驚かせた。このスタイルは寛政十年の、茜屋半七によつて極められる。その白手拭いの頬かむり姿は今日に踏襲される(『芝居絵に見る江戸・明治の歌舞伎』早稲田大学演劇博物館編、小学館、二〇〇三年)。「絵でよむ江戸のくらし風俗大事典」(棚橋正博編著)所収『奇事・中洲話』(寛政元年、京伝作、北尾政美画)解説によると、「演劇の……男女の道行の場面では、純白の手拭で頬被りをするのが決まり」としているが、本書のおちよんは黒縮緬で大明頭巾・御高祖頭巾を被つてゐるようだ。大明頭巾は江戸に下つてきた上方歌舞伎の女形、初代中村富十郎が被つたことから人氣が出た。たちまち、江戸の娘たちの間に広まったという。御高祖頭巾として女性に普及した袖頭巾の一種。袖頭巾は振り袖のたもとのような形に作つたところからの称。これが御高祖頭巾に変わる。『賤のをだ巻』に「袖頭巾とて黒縮緬にて……」。宝曆・明和頃に流行。明和七年刊洒落本「辰巳之園」に「郡内縞の袷羽織に、海黄の裏を附、袖頭巾をひらひらとかむり」。『嬉遊笑覧』によると、御高祖頭巾は衣の袖のように作り、紐をつけたもの。袖頭巾から変じたもので、

かぶった形が日蓮上人の像に似たところから、この名があると  
いう。目だけを出して頭・面部を包む。『角川古語大辞典』で  
は『春色梅児誉美』の図版を、『絵でよむ江戸のくらし風俗大  
事典』（前掲書）では『通増安宅閑』（天明元年、鳥居清長画作）  
から大明頭中の図版を、『山満多山』（文化元年）から袖頭中の  
図版を挙げる。

#### 4 間違えられた恋人（十八ウ・十九オ、図4）

**つゝき** 胡散な代物、こんな所を起こして、くどくど暇入  
れて断り言わふより、案内なしに乗つてから目の覚めしとき、  
ぜひにと頼まば、この女ハ定めて野暮なやつにてハあるまじ。  
どふかなるであらう」と、独り合点して比丘尼をつれ来り。こ  
の船に乗せ、「もし船の目目を覚まして咎めなば、訳を語りて  
頼みおかるべし。我ハこの辺の煮売屋へゆきて、何にても食物  
を求めきたるべし」とかの比丘尼、よく言ひ含めおきて、その  
男ハ又船より飛び上がりて出てゆきける。暫くして艶二郎立帰  
り小声にていふハ「今宵一夜こゝに忍びて夜を明かすつもりに  
て、食物を調べにゆきたれども、よく思案するに、明日ゆ  
う／＼と立退かば、もしや追つ手の者に見付られてハ詮無し。  
今宵のうち志す方へ少しも踏み出しおくべし。幸いあれに駕籠  
を借りておきたれば、早くきたられよ」といふと、かの比丘尼  
ハおのれのことと心得、気の急ぐまゝに、ともかくもよきやう  
にと、暗がり紛れ船を這い出て男の手をとれば、艶二郎ハ比丘

尼ともしらず、かの腰元おちよんと思ひて、背中に負ひ四五丁  
ゆきて、駕籠を約束しおきたることゆへ、すぐに駕籠のうちへ  
押し込み垂れを降ろして急ぎの者なりと、値に構はず駕籠を飛  
ばせて急がせ、その身も尻ひっからげて駕籠の後より走り出し、  
夢中になつて三四里も逃げ延び、早夜明け前となりて、駕籠ハ  
定めぬ所なれば比丘尼を降ろしてひっかへす。艶二郎これを透  
かし見て肝を潰し、「これハどふしたものだ。いつのまにだれ  
がそのやうにくり／＼坊主にしたことぞ」といふに、この比丘  
尼もびっくりして「こなたハたれじや。男が違ふた。なぜわし  
を連れてきたのじや。」**つぎへつゞく**

\* 船の中で熟睡している女の傍に比丘尼を降ろして男も食料  
を買いにいく。戻つた艶二郎が追つ手に見つかる前に発つとい  
う呼び声に、比丘尼は暗がりになつて一行の男と思ひ背負われ  
る。駕籠を飛ばし、降りたらお互いびっくり。このように駆け  
落ちの相手を間違えるという事件が、状況的に荒唐無稽じやな  
く、起こりうる、ありそうな話として写實的に描写されている  
のは、合巻の特色ともいえよう。艶二郎は夢中になつて「三四  
里も」、即ち十二キロから十六キロもの距離を飛ばしたことに  
なる。「いつのまにだれがそのやうにくり／＼坊主にしたこと  
ぞ」という驚き方が滑稽。前の二丁と同様、詞書を別に設けず、  
間接話法を駆使した本文になつている。

時間が大きくずれるが、これを一つの場面に収めるのが異時



図4 間違えられた恋人 (十八ウ・十九オ)

同図法である。例えば『童蒙話赤本事始』(馬琴作、国貞画、文政七年刊) 上巻末尾に異時同図法が見られる。たぬ吉が正六・すなほ夫婦に生け捕えられる場面が右と左に掛けて大きく描かれ、左上に臼搗いているすなほと吊されたたぬ吉が小さく描かれる。本場面(図4)は、時は漆黒のような真夜中。左の上の方では艶二郎(尻をからげて、頬被り)が比丘尼(額にしわ、袈裟姿)を背負っている。小さく描かれているので、こちらは先に起きた事件で既に遠くへ行ってしまったことが分かるような描き方である。右と左に掛けて大きく描かれているのは、屋根船の中で驚く体のおちよん(頭巾を被っている。彼女が脱いだ雪駄の片方が覆っている)と、食料品を手にして戻った男(職人風半纏ではなく襦袢の尻をからげて、片肌脱いでいる。振り鉢巻、腹掛け)がおちよんを見て驚く体。これは本文では語られない場面を図示している。本文では省略された後の事件を想定して絵柄で補充して見せているのである。

5 捕らえられる艶二郎 (十九ウ・二十オ、図5)

つぎ 元の所へ帰して下され」といふに、艶二郎聞、て「さても心得ぬ。船に我等の連れの女をおきたるが、こなたハどふして、またあの船へいつのまに乗ってござった」と不審を立つるに比丘尼ありのま、を語れハ、「さてハそれで取り違へたのだ。これハ情けない。あの美しい若い女と年寄の比丘尼とハ、銀の代はりに鉛を取ったやうなもので、これハとんだこと



図5 捕らえられる艶二郎 (十九ウ・二十オ)

をした。最早三里あまりも来ることなれば、今より後へ立帰たりとも、その船に在ることやら、どふなりしぞ」と心許なけれバ、とかく八後へ戻りみるべしと、それよりまた比丘尼諸共打連れて、急ぎひつかへす所に向ふより足軽体の侍一三人、中間ども引き連れ来りて、「さてこそ妙珍比丘尼め、それ逃すな」と言ふ程こそあれ立ち掛、つて、比丘尼を踏み倒し押さへて縄を掛たりける。艶二郎これをみて、真つ暗さんぼう逃げ出す所を、「相手の男め、それ逃がすな」と走り寄つて艶二郎をひつ掴み、有無を言わせず押さへつけて、これも縄を掛けたりける。艶二郎ハ合点ゆかず様子を聞けバ、かの比丘尼といふハ、お屋敷の奥に久く使はれて奥様お下屋敷へ御隠居なさるにつけて、この比丘尼も奥様と一緒に髪を下ろし、お側に付添いたりしが、元より悪性者にて得知れぬ者といつのまにやら乳繰り合ひ、奥様のえ(へ)そくり金を盗み出して男と打ち連れ駆落ちせし者なれば、追つ手かゝりてさてこそ捕らへられたるなり。艶二郎この様子をきいて、我に覚へなきことゆへ、色々言ひ訳し、船の間違ひをいへども、なか／＼聞、入れず、言ひ訳ハ屋敷へ参りて致すべし、と高手小手に戒められ、遠く屋敷へ引かれゆく。艶二郎思ひかげなき目にあひ、腰元のおちよんのことも如何なりしや、と心にか、れど、詮方なく涙ながらに引かれける。

(艶二郎に縄を掛けようとしている足軽)へこいつ面付きハ気のきいている男だが、色事にハ飢へているとみへて、あのやう

な年寄比丘尼と逃げるといふハ、いやはや外聞の悪ひ男だ。世間の色男の面汚しとハおのれのことだ。

(同 足軽) へおれハこれでも若いとき、十七になる美しい娘を連れて逃げたものだ。そのときの話がしてきかせたい。わいらのやうな色男とハ違つて、それハくその娘がおれに惚れたことハ、いやはやことも大層に惚れて、いっそ骨がなくバ一つになりたいと、ぬかしおつたはへ。

(比丘尼) へどふぞ見逃しにして下さりませ。それがいやなら、またこれから、おまへ連れて逃げて下さりませ。もふかうなつてハ、だれでも構はぬ。相手さへあれバどふぞ逃げたふござります。

(比丘尼を見ている中間) へあのやうな生しらけた男と逃げるよりか、おれと逃げればよかつた。おれハ頭に毛が少なく、ちよつとみると坊主のやうだから、貴様と重なりやっていると、おれがうはぞなへのやうで恰度よいに。

(比丘尼の手をねじ上げ、縄で縛ろうとしている足軽) へおのれもふちつと若くて美しいと、縛るにもそつと縛つてやるに、何をいふにもその面だから色気がないによつて、そつとハ縛らない。横つ面を張り飛ばして縛つてやらう。

(中間) へ不義者め、捕つたとつた。とつたことハ内緒く、でハ、相済まぬぞ、不屈き者めが。

\*年寄りの比丘尼が頂けない艶二郎が引き返そうとするとこ

る、比丘尼が仕えていた奥様の金を盗んで駆け落ちしたとして、追つ手に捕らえられて屋敷へ護送される。絵組の登場人物は、二本差し、パッチの上に脚絆、草鞋(足首に引つ掛けの紐「かえし」が付いている)着装の足軽二人と、その足軽二人にねじ伏せられ、捕縄に掛けられようとする比丘尼と艶二郎。中間二人は一本差しに裸足である。

日傭取について、『江戸学事典』では、町人が武家方に徒士・足軽・鎗持・六尺・草履取・挟箱持・中間などとして雇われると、その雇傭期間中は武士に準じた扱いを受け、契約が終わると、もとの町人の身分にもどるとある。「中間」とは、武家の下僕で、足軽または若党と小者との中間に位する。「言ふ程こそあれ」は、言うやいなや。「高手小手」は、両腕を背後にまわし、首から肘にかけて厳しく縛ること。高手は肘から肩までをいい、小手は肘から手首までをいう。「わいら」は、目下に向かつていう対称代名詞。また対者を罵つていうのにも用いる。お前。

本文最後の「詮方なく涙ながらに引かれける」という表現が笑いを催すが、それに加えて、図様の登場人物に割り当てられている台詞にも滑稽性が見え隠れする。「色事にハ飢へているとみへて……世間の色男の面汚しとハおのれのことだ」の評価は合っている(他の場面ではまさに「飢えている」ので)ようである違つている(この場面では誤解なので)ようである、それがまた滑稽。「いっそ骨がなくバ一つになりたい」。比丘尼は状況に似合

わぬ無駄口を叩いているように見えるが、無駄口の中に本心が見え隠れする滑稽さ。「貴様と重なりやっていると、おれがうはぞなへ（上備え？）のやうで恰度よいに」は下ネタを用いた比喩で、鏡餅の連想か。

## 6 責められる艶二郎（二十ウ、図6）

艶二郎ハ比丘尼と一緒に屋敷へ引かれて、空き長屋へ押し込められ、また引き出されて詮議にあひしところ、比丘尼の持ち出したる金ハ男に渡しおきたる由ゆへ、艶二郎を捕らへてその金の詮議するに、艶二郎困り果て段々のありしことどもを語りさまぐ言ひ訳すれども偽りならんとて、なか／＼き、いれず、散々に打叩かれ責められけるが、段々言ひ訳たちて知らぬになり、さてハ人違ひなり、とて艶二郎ハやう／＼逃れて助かりけれども、肝心のおちよんハどこへかやつてしまひ、ろくでもない年寄比丘尼を間違へて、此災難にあひ、独り小腹を立て、ぞ立ち出ける。

（武士）へその方ハついに見慣れぬ男、あの比丘尼妙珍んとハ如何なる事の縁により、いつのほどより馴れ初めしぞ、その話がき、たい／＼。

（艶二郎）へわたくしハ十七八の、かはゆらしい娘を連れて逃げたのでござります。あの比丘尼どのハ途中でついすり替はったのでござりますから、なにもわたくしハ存知ませぬ。わたくしのやうな色男が、なに比丘尼ぐらいを連れて逃げるものか

御推量 下さりませ。

\* 詮議にあい叩かれ責められるが、最後は無罪放免される艶二郎。図様は白州に畏まって言い訳する体の艶二郎。その後ろには下役人が控える。縁側にあぐらを組み、艶二郎を見下ろして苦心の体の武士（袴姿に扇子）。

本合巻で艶二郎が腹を立てるという表現が三回見られる。最初は年季が明けたら女房にと約束していた女郎に騙されて、二回目は友人のヒョン吉に持参金のことを騙されて、今回は自らの粗相での三回目の腹立ちということになる。「独り小腹を立て、ぞ立ち出ける」というふうには、本文は何となく滑稽なオチを以て締め括られる。このような失敗は、黄表紙の艶二郎とは異なつて、馬鹿な行動の結果ではなく、自然な流れを以て写實的に描出される。艶二郎の台詞は自惚れではあるが、理にかなつた言い訳をするので常識人艶二郎といえよう。

## 三、結びに代えて

未だに翻刻作業が施されていない未知の草及紙作品はたくさん残されている。変体仮名を読むのに骨が折れる上に、読めたとしても「きちんと」読めたかどうか自信が持てなかつたりするからである。書かれた文字以上に、描かれた図像を「きちんと」読むことは至難の業である。些細な小道具一つ取つても意味なくその場面に描かれることはないからである。その意味を



図6 責められる艶二郎 (二十ウ)

解明するのが草双紙の注釈作業というわけである。言い換えると、翻字と解題という注釈作業を通さないと、草双紙は読めるとはいえないということである。

しかしながら、不完全であるかもしれないという不安を抱きつつも、あえて草双紙の翻刻作業に取り組むことによって、はじめて見えてくる事柄は多い。この発見はその作品の梗概のみ知っていては決して見付けられない発見であるゆえ、翻刻作業は欠かせない研究方法であると思う。

例えば、画像のみ見ると、ご飯のおかずのように色を売り歩くという滑稽な設定かと思うと、続く地の文で「と、呼ばはつても歩かれず」と書かれているから、結局ここまで非現実的な馬鹿はやらないのはじめてわかり、荒唐無稽な黄表紙との差が理解できるのである。同じく、駆け落ちの相手を間違えるという事件が、状況的に荒唐無稽ではなく、起こりうる、ありそうな話として写實的に描写されているのも、地の文を丹念に読むことでわかる合巻の特色である。

艶二郎に対して「幸福者なり」が本作では度々使われる。が、この言葉が艶二郎を皮肉っているということは、本文を丁寧に読んでこそわかる意味合いといえよう。また、本文では語られない場面が画像として図示され、本文では省略された後の事件を想定して絵で補充して見せていることは、絵を丁寧に観察してこそ、初めて得られる成果であろう。また「演劇の……男女の道行の場面では、純白の手拭で頬被りをするのが決まり」と

先学の研究で言われるが、本書のおちよんは紫か黒の縮緬地の大明頭巾（袖頭巾・御高祖頭巾とも）を被っているだろうことが、本文や図像には明示されなくても色々な資料を調べることであるのも、本注釈作業の成果として挙げられよう。

#### 参考文献

- 市古貞次他編『日本国語大辞典』小学館、一九七二～一九七六  
内ヶ崎有里子『江戸期昔話絵本の研究と資料』三弥井書店、一九九九  
高木元「草双紙を研究すること」『江戸文学』三五、ぺりかん社、二〇〇六  
拙稿「『色男大安売』考——翻字と解題（Ⅰ）」『文学研究』九四号、日本文学研究会、二〇〇六年四月  
拙稿「『色男大安売』考——翻字と解題（Ⅱ）」『東大超越文化科学紀要』十一号、東京大学、二〇〇六年九月  
棚橋正博編著『絵でよむ江戸のくらし風俗大事典』柏書房、二〇〇四  
中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義編『角川古語大辞典』角川書店、一九八二～一九九九  
新村出編『広辞苑』岩波書店、一九九八  
西山松之助他編『江戸学事典』弘文堂、一九九四  
前田勇編『江戸語大辞典』講談社、一九七四

早稲田大学演劇博物館編『芝居絵に見る江戸・明治の歌舞伎』小学館、二〇〇三

#### 注

- (1) 高木元「草双紙を研究すること」(『江戸文学』三五、ぺりかん社、二〇〇六)  
(2) 二十一丁表から二十五丁表までは「合巻『色男大安売』考、その翻字と解題Ⅳを通して」(『東アジア研究』一、全南大学校東アジア研究所、二〇一〇年三月)、二十五丁裏は「合巻『色男大安売』の本文末尾と広告、新版目録について」(『THE ASIAN JOURNAL OF CHILD CARE』1、児童支援学会、二〇一〇年三月)という拙稿で論じており、『色男大安売』全編のハンゲル翻訳を『近世日本の大衆小説家、十返舎一九作品選集』(二六五～三六四頁、ソミヨン出版、二〇一〇年五月)という拙著に収めている。